

書 評 と 紹 介

西川真規子著

『ケアワーク 支える力をどう育むか
——スキル習得の仕組みとワークライフバランス』

評者：岡村 清子

1

本書は、ケアワークという生涯のすべてのライフステージに存在する「人は人を支え、人は人に支えられる」というソーシャルサポートによる社会関係を、「ケアしケアされる」というケア関係におけるケアワークから総合的に捉えなおし、わが国におけるケアワークの再構築の必要性を論じている。

ケアワークについて「これまで、ケアワークとは、家庭や地域で日常的に実践されている乳幼児の保育や高齢者、障がい者や病人の介護のことを意味してきた」（13頁）と述べ、ケアの具体的内容を、①家族や親族、近隣住民によってインフォーマルに無償で提供されるケアワーク、②専用の施設や専門職によってフォーマルに有償で提供されるケアワークの2つに分類して総合的に論じている。

これまでのケアワークの議論は高齢者介護中心であり、①のケアワークについては、要介護者の増大や要介護期間の長期化、ねたきりや認知症の要介護高齢者の急増による家族介護の困難、孤立化・密室化した家庭内での高齢者虐待

や介護心中・介護殺人、嫁、妻、娘等女性が担う無償労働へのジェンダー論からの批判、急増する男性介護者の現状とセルフヘルプグループからの問題提起など、家族介護者及び要介護者双方にとって、深刻化していることが論じられてきた。

一方、②については、介護保険として制度化された。在宅ケア、通所ケア、施設ケアなど介護保険のサービス利用者は増大しており、「保険あってサービスなし」という状況を甘受せざるを得ない家族が増大する中で、有料老人ホームの利用者が増えている。また新たに無届けの居住施設利用者の悲惨な生活実態が明らかになった。

他方で、増大する施設ケアのニーズに対応できないという「介護職の労働問題」は、離職率の高さによる慢性的労働力不足、労働条件の劣悪化、介護職の有資格者の潜在労働力化が進み、有償労働によるケアワークの問題が利用者と介護職双方にとって深刻化している。

このような危機的状況の中で、無償ケアワークと有償ケアワークは「代替的關係」として個別に議論されてきたが本書では、「相互補完的關係」という視点から総合的に捉え直している。また、知識労働として再評価し、人材育成の方法についても言及し、ケアワークの再構築のあり方を提案している。

本書のケアワーク論がこれまでの議論と異なる点は第一に、育児と介護、家庭と専門サービスというそれぞれ異なった対象やサービス提供の方法を総合的に論じている点である。第二に、平均的なファミリーライフサイクルを想定した場合、ケアを必要とするステージである子ども期と高齢期、ケアを提供する側である労働期に

分けられるが、労働期の生活のあり方、すなわち雇用社会での労働と家族について言及していることである。ケア労働を主婦労働から男女の無償労働へと復権することなしには、ケアワークの再構築はありえないとしている。

第三に、ケアワークを家庭内で男女が担うためには、男女が正規雇用で働き、ワークライフバランスが保障される必要があること、第四に、このような働き方によって成立している家族は、ケアワークに要求される他者との信頼関係構築に必要な「共感」や「コミュニケーション・スキル」を獲得するために不可欠であること、第五に、高齢者を対象としたケアワークについて、ホームヘルパーの調査結果の分析により、知識労働として再評価していることである。

以上のようにケアワークを総合的に論じた研究は、これまでの研究にはみられなかったが、今、求められている介護問題への対処は、日夜ケア関係が展開されている場所である家族や介護の職場の問題として個別に解決することに加えて、ケアワークを総合的に捉え返し、総合的に解決していく方法である。

本書では、家族や介護福祉の労働現場を取り巻く様々な社会環境、すなわち慣習、文化、労働慣行、家族と労働のあり方、女性がケアワークに従事せざるを得ないという性別役割分業の社会システム、低賃金分野として位置づけられてきたケアワーカーの労働条件のみならず、乳幼児期や学童期の社会化のプロセスなどを総合的に論じており、海外の研究成果を紹介しながら新たな地平を開いている。

2

本書は、序章、終章を含めて全6章からなり、1章から4章のそれぞれの終わりには3頁程度のまとめを記している。まえがきには、専門家に限らず多くの人々に読んでいただきたいとい

う趣旨から分かりやすい表現方法に書き直したことが記され、読者の関心に沿ってそれぞれの章から読むことを勧めている。様々な読者を想定してケアワークの復権を願っている著者の本書に込めた思いが伝わってくる。

全体の構成は、序章「ケアワークにまつわる社会通念」、第1章「ケアワークとは何か」、第2章「なぜ弱体化したのか－雇用社会化との対立を解く」、第3章「働き方との相乗効果を図る－家庭におけるケアワーク」、第4章「有償ケアワークを専門職化する－スキルの拡充と人材育成」、終章「ケアワークの再構築」、となっている。

第1章では、ケアワークについて「相手の身体に対する直接的介護など、可視化できる行為によってとらえられ評価されがちである」(43頁)が、「相手の行動や感情、思考傾向に機敏に反応しながら、その生きていくうえでの不具合に気づき、相手の自己感を理解したうえで、そのよりよく生きようとする力を支えていく労働である」(36頁)と定義し、他者志向的な労働であるとしている。

このように定義した労働について実践レベルでの行為体系としてみると、「課題設定」→「課題解決(改善)」→「結果のモニター」という三つの主要プロセスに分けられ、「この一連のプロセスを円滑に循環させて、よりよいケアワークを実践するには、絶え間ない情報収集と、得られた情報を的確に判断に適宜結びつけるスキルが必要となる」(42頁)とし、非熟練労働ではなく「知識労働」であるとしている。

また、三つの主要プロセスを円滑に進めるためには、相手の立場に身を置く「共感」や様々な角度から相手の立場を推測する「多様な視点」が必要であるとし、心理学者や神経学者の研究成果を紹介しながら、これらを獲得していくための幼少時の養育環境の重要性を述べている。

「共感」は成長過程における環境との相互作用によって規定され、共感を持つ機会を多くすることによって生まれ幼少期に著しく発達すること、この時期すなわち臨界期を逃すと発達が難しくなること、子どもは、身近でケアする親、祖父母、保育者を通じてケアワークの基本学習を進めているなど、幼少期の学習を通じてケアワークに必須である共感と多様な視点が身につくことを紹介している。

また、「多様な視点」の獲得と体系化の能力は乳幼児期において発達し、児童心理学の実験結果を紹介しながら、様々な種類の人と多くの談話や対話を通じた深い係わり合いを持つことが、視点の多様化にかかわっており、社会的なかわりを持つ環境を提供することが求められている。

第2章「なぜ弱体化したのか－雇用社会化との対立を解く」では、乳幼児期の共感や「多様な視点」などの学習の場が減退してきた主要因として、雇用社会化とそれを支えてきた性別役割分業について論じている。1980年代以降、既婚女性のパートタイム雇用が、1990年以降からは、「女性の中核労働化」が急速に進み、「女性がケアワークの実践を通じてわれわれの社会で果たしてきた再生産機能も減退し、いずれはそれが市場での直接的な生産活動にも影響を及ぼす」(98頁)ことが懸念され、雇用社会化とケアワークを対立的な関係としてとらえている。

このような現状を改善していくための方策としてワークライフバランスを提言しているが、ここでは、個人の「生活と仕事の調和」ではなく、広く職場や社会レベルで質的に「融合」した「生活と仕事の融合」を目指す必要があるとしている。

第3章「働き方との相乗効果を図る－家庭におけるケアワーク」では、家庭におけるケアワーク強化のメカニズムについて、「ソーシャ

ル・キャピタル」という概念に基づき説明している。ソーシャル・キャピタルは、人と人とのつながり方という側面から見ると、家族や親族に代表されるような外部社会に対して閉じた、濃密な紐帯からなる「絆型キャピタル」と集団を超えたネットワークである「橋渡し型キャピタル」に分けられるが、ケアワークの基本である「共感」は、家庭内あるいは親子間での絆型キャピタルによって育成され、「多様な視点」の育成には、橋渡し型キャピタルが有効であるとしている。

これらの異なったタイプのソーシャル・キャピタルは、ワークライフバランスの実現によって可能であり、「仕事領域と生活領域の双方で男女協業化を推し進めていくことが、家庭でのケアワークの強化に必要」(146頁)と述べている。

第4章「有償ケアワークを専門職化する－スキルの拡充と人材育成」では、著者らが実施した「ホームヘルパーに関するアンケート調査」(2003)の因子分析によりヘルパーに求められる四つのスキルグループを抽出し、因子名を「コンテキストの理解・管理」「コミュニケーション」「感情管理」「初対面对応」とした。これらのスキルは、利用者のサービスの質と高い相関関係が見られ、「これら四つのスキルが高いヘルパーは、平均的に質の高いサービスを提供しているだけでなく、利用者によるサービスの質のばらつきも小さい」(174頁)という結果を紹介している。

四つのスキルのうち「コンテキストの理解・管理」は反芻学習を通じて、「コミュニケーション」は経験年数によって、「初対面对応」は資格の影響が大きく公式な訓練により、「感情管理」は個人的属性によるところが多いとしている。

このように現場における経験学習により専門的知識が向上することから、効果的な学習方法

として「玉葱モデル」(Onion Model)という学習者である介護職が玉葱の中心部をなし、その周辺に内側から外側に向かって実務経験、実務指導者、教育担当者の順で位置づくというモデルを紹介している。また、介護職の非正規化は専門的知識の獲得に不利であるために、これらを阻害することがないように十分留意する必要があることを指摘している。

終章「ケアワークの再構築」では、家族によるケアは質量ともに減退されつつあり、「減退しつつある家族ケアに対する量的な代替の手段」(205頁)として有償ケアワークの役割が増しつつあるが、代替の関係ではなく、相互補完的关系を模索することの必要性について論じている。

具体的には家族介護の長所は、「人生をともにすることで築かれた強い絆に根ざし、対象者の自分らしさを掘り下げながら支援できる点」、短所は、「家庭は閉じた空間となり多様な視点を取り込むことが難しくなる」ことである。有償ケアワークの長所は、「その専門的知識やスキルに根ざした多様な視点をはじめとする、家庭にはない豊富なリソースを導入し活用することが可能」、短所は、「家族によるケアワークに比べると、対象者と絆を強め、協力を取りつけ、適切なケアを実践するために必要な情報を得るのが難しい」というそれぞれの長所と短所を考慮しながら相互補完的关系を築くことを提案している。

そして家庭でのケアワークの活性化のための共感と多様な視点の獲得、有償ケアワークによる知識の体系化と社会への還元役割を遂行していくことが、ケアワークの再構築にとって不可欠であるとしている。

3

以上のように、本書は、第一に、ケアワーク

を定義し、家族のライフサイクルのそれぞれの時期に家庭内にケアワーク遂行上の重要な発達課題があること、第二に現在の家族と職業のあり方を「ワークライフバランスの融合」へと変えることなくしては介護問題の解決はあり得ないこと、第三にケアワークの専門職化のプロセスを実証したこと、第四に家庭のケアワークと有償ケアワークを代替の関係から相互補完的关系へと転換することの必要性を論じたことなど、これまでに見られなかった学際的な研究書として高く評価できる。

以下では、本書では論じられていない、2章と3章の論点について述べる。

第2章は、雇用社会化とケアワークやケアワークの伝承の衰退という論点を述べているが、雇用社会化だけではなく、医療の発達による1950年代までにみられた出産は自宅から病院へ、家庭や隣人による自宅での養育から、保育所入所と幼児教育や塾通いの低年齢化へ、自宅での死から病院での死へと病院化や施設化などの社会環境の変化の影響がある。

また、ケアワークの対象者の変化を挙げることができる。子ども数が戦後直後の合計特殊出生率4人という時期には、家庭電化が進んでいないために主婦は家族の中で一番早く起床して、最後に寝るという生活であり、一日中乳飲み子を背中に背負って働いており、授乳の時だけ休養できるという主婦像が一般的であった。性別を問わず、上の子は下の子をおんぶしたり、引き連れて遊びに出かけ、異年齢集団の中で遊びを通じてケアを学んでいた。このように子どもたちは日々の生活の中で赤ん坊や幼児について理解し子育てを学んでおり、親としての準備教育となっていた。

また、高齢者ケアについては、平均余命が短かった時代は臥床期間も短く、1960年頃までは何年も入浴したことがなく、褥瘡(じょくそう)が

あるのが当たり前という劣悪な環境であった。農繁期は家族が農作業で出払っており、子ども夫婦が昼食時に帰ってきて世話をし、孫が学校から帰ってきたら声かけする程度のケアもみられた。座敷牢のような暗い部屋で一日中過ごしていた事例もみられ、リハビリテーションやQOLという視点からは程遠い時代であった。病気の時の静養についての知識の伝承も、結核等の伝染病が多く隔離中心であった。高齢者介護について知識の伝承があったのかは疑問である。

第3章では、家族ケアをソーシャルキャピタルの視点から論じているが、ケアという世話労働の具体的な実践が伴わない限りはスキルの習得は難しいと思われる。これまで介護労働を主婦が担ってきたのは、世話の内容が、朝起きて洗顔から始まる身づくろい、食事の世話などいわゆるADLやIADLの程度に応じた具体的な生活技術、および手早く料理をして片づけ、快適な居住空間を保障するという家事労働の延長線である。要介護者の介護度によって介護に費やす時間と技術は異なっており、共感や多様な視点という「社会的自立」も重要であるが、介護者の衣食住についての「生活自立」が不可欠である。

家族による「絆型キャピタル」と絆的つながりと家族関係と近隣関係を越えた仕事関係という中での「橋渡し型キャピタル」の育成は生活を共にする集団行動によって養成されるが、雇用社会化により家族の個人化が進み、地域とのつながりが希薄化し、家族が「絆型キャピタル」を形成する条件が少なくなっている。また、ワークライフバランスが必ずしも「家族共同時間」の増大に結びつかず、「個人時間」の増大となることも予測できる。

また、終章では、家庭のケアワークと有償ケアワークを代替的關係から相互補完的關係へと転換することを提示しているが、現在でも代替

的關係として利用している事例と補完的關係として利用している事例とにわけられる。家族介護について著者が家族の長所として述べている点は、要介護者のADLやIADLの程度や要介護者と介護者双方にとってのQOLという視点と家族内の要介護者数と副介護者の有無によって異なる。代替的關係か相互補完的關係かは利用者と利用者家族が決定すべきことであり、その結果、有償サービスの需要が増大することはやむを得ないと思う。

家庭での衣食住を中心とした日常生活の中で展開される介護のレベルや家族関係の差異は大きく、家庭内での介護生活における格差問題がすでに存在している。

介護保険で提供されるケアは画一化されがちであるが、ハード面や職員の人員配置や資格など様々な規制により最低基準があるものの、介護の質は大きく異なるという背景もある。公的介護サービスの利用についての評価は、これまでの生活との連続性において「高水準」「同程度」「低水準」とおおまかに区分されるのであり、利用者の生活歴という視点からみるならば大きく異なっているといえよう。

以上の問題提起に加えて、3章の図表3-13から19の子育ての負担感をワークバランスとの関連で見ているが、負担感はその子どもの年齢や子ども数によって影響を受けること、図表3-26から31までは、同居家族数や労働時間などの変数と介護ストレスという2変数のクロス集計結果であるが、介護ストレスは、高齢者のADLや認知症の程度、副介護者がいるか否かで異なってくるので、これらの変数を含んだクロス集計結果が必要である。

4

本書を通じて現代社会における子どもと高齢者の置かれた危機的状況が浮かび上がってく

る。ケアワークにおける伝承文化の衰退は、家庭生活機能の外部化、とりわけ食文化の変化とも大きくかかわっている。食の外部化が進み、食事を通じた会話が成立しにくい日本の家庭が増えている現状について、もはや家庭生活の中でのみ生きる力や共感、多様な視点を育むことには無理がある。

食育基本法が成立して、「早寝、早起き、朝ごはん運動」が進められている現在、朝から夜までの生態リズムや生活リズムが崩れ、24時間社会の夜型社会の中で犠牲になっている子どもたちにとって、ケアワークを学ぶ前提の生活が崩れている。学校、家庭、地域社会における人と人とのつながりを通じて、家族関係や多様な人間関係を学ぶ基盤づくりが必要である。

以上、いくつかの疑問点について述べたが、従来の「ケアされる人」「ケアする人」「ケアす

る人の支援」という個別のケア関係に止まらず、また、ケアワークを高齢者福祉や児童福祉という従来の個別の学問分野を超えた社会システム全体の問題としてとらえ、介護職を知識労働として評価し地位向上の必要性を論じた本書は、新たな方向性を示した内容といえよう。また、家族の絆を「性の絆」から「ケアの絆」という視点でとらえなおしていくというフェミニズム法学の動向と相俟って（『ケアの絆－自律神話を超えて』、マーサ・A. ファイマン著＝穂田信子・速水葉子訳、岩波書店、2009）、今後の展開が望まれる。

（西川真規子著『ケアワーク 支える力をどう育むか－スキル習得の仕組みとワークライフバランス』日本経済新聞出版社、2008年12月刊、245頁、定価2,000円＋税）

（おかむら・きよこ 東京女子大学現代教養学部教授）